



OF **オ** TALK

高橋和さん

[女流棋士]

涙を流すほどの悔しさを、
歓喜の声を挙げるくらいの嬉しさを、
本気の感情を経験させたい。
女流棋士の世界をリードしてきた高橋和さんが、
将棋の醍醐味について語ってくれた。

負けず嫌いの少女

幼い頃から、「勝つこと」に執着がありました。小学生のとき、昇級の一番で負けた事が悔しくて、涙をぐっところえ、家に着いてトイレに駆け込んで泣いたときのことをいまだに覚えています(笑)。将棋に限らず学校の勉強でも負けず嫌いでした。たとえば98点のテストを持って帰ると、父親からは「なんであと2点取れなかったのか?」と言われたので、自分でも点数を取れたところよりも、出来なかったのは何故かを考えることが重要だと思うようになりました。私自身が100点を取りたいという思いが強かったのでちょうど良かったのかも知れませんね。

プロの世界

どの世界でも同じだと思いますが、最初は目に見えてぐんぐん成長し、やればやるだけ目に見えて上達し、結果として出てきます。ただ、プロの世界の人は、技術的、精神的なことの大半の努力はしてきています。そういう人たちが集まっているところだと、何ミリという階段を上るために努力しなくてはなりません。何ミリという差が実は大きな差です。ところが、何をつかんでよいのかさえわからない。ただ、上に行くには「何か」が違うということだけはわかっているんです。トッププロはそれを乗り越えること

ができる人です。「自分の限界がわからない中で努力をする人間の強さ。」これこそがトッププロの凄さだということを感じていました。

「本気」の感情を育てる

2000年から子どもスクールの講師をしています。そこで子どもたちと関わっていて感じることは、昔と比べて子どもは変わっていないということです。むしろ周りの環境や親が変わってきていると思います。大人が過保護になり、守ってあげようという気持ちがよく見えます。親たちにはむしろ、突き放す勇気をもって欲しいと思います。「痛い」経験や「悔しい」思いをさせないと、何が痛いのか何が悔しいのかわからないからです。今は色々と経験させる選択肢が広がっているので、色々なことに挑戦させた方が良いでしょう。子どもたちには、どの世界でもよいので何か真剣になれるものを身に付けてあげたいと思います。たまたま私は将棋しかできないので、その将棋を通じて、子どもたちのその経験を増やしてあげたいと思っています。テレビゲームはそれなりに楽しいものですが、所詮真剣ではないと思います。「心のリセット」が効いてしまうからです。例えばクリアできなかった場面では、リセットボタンを押せばあっさり最初から始まるし、気持ちも「そこでダメだった」というのが後まで残りませんよね。

負けた経験がある人間は強い

将棋をやっている子どもたちに、不思議と身に付くのは、負けた相手に気を遣うということ。

将棋で勝ったときでも「ワーッ」と喜びを表すことはありません。本当は嬉しいけど、負けた経験がある人間は、相手の気持ちを知っています。それを考えると、「ワーッ」と喜ぶことはできないのです。子どもながらにそれを学んでいるんですね。あるお母さんから聞いた話ですが、勝った子どもが、机の下でガッツポーズをしていたということですよ。

将棋で負けたときは自分の打った手が原因ですから、すべて自己責任です。ですから、どんなに悔しくても相手をねたましく思う気持ちは起こりません。負けた悔しさは、そのまま受け入れるしかありません。だからそんな時は「悲しい」とか「辛い」というのはこういうことなんだと理解すれば良くて、何も落ち込む必要はないのです。次へのステップになれば、勝ったことよりも価値が出てくるのではないのでしょうか。負ける悔しさを知っている人は、勝つ喜びも負けた人の痛みも知ることができるのですから。



高橋 和 (たかはし やまと) | プロフィール

1976年神奈川県生まれ。小学校1年生で父親と将棋を始める。91年春、中学3年生のときに、史上最年少14歳で女流プロ棋士(女流2級)デビュー。4大タイトルの一つ、倉敷藤花戦で1999~2001年まで3年連続ベスト4。2005年2月9日現役引退。座右の銘は「継続は力なり」。

涙を流すくらいの悔しさを、
歓喜の声を挙げるほどの嬉しさを、
本気の感情を経験させたい。